

ムゲンニュース

第17号

発行日：2023年10月

発行：NPO法人ぴあ ルーテル作業センタームゲン

住所：愛媛県松山市木屋町1丁目9番地2（伊予銀行本町支店北側を入って30m）

営業時間：8:00～16:00 休日：土・日・祝祭日

TEL・FAX：089-924-8533（代表）

E-mail:mugen@joy.ocn.ne.jp

目次

ムゲンこの夏 佐野秀樹	2
パソコンでの作業はどんな内容か？ 荒木和貴	7
内職 中村優	8
蹴球女子・ファイナル 佐野秀樹	10
坊ちゃん育ち 佐野卓志	20
あとがき	39

「ムゲン、この夏」

こんにちは。人気小説家の（ウソです）佐野秀樹です。昭和末期。発足当時から僕が見て来たムゲンは、20代、30代が中心で、平均年齢も若い作業所だったのですが、今は50代～60代が大半を占める、まるでプチ老人ホームの（？）ような作業所になってしまいました。なので、お尻を触っても怒らない20代のヘルパーさんを募集しています（ゴメンナサイ、これもウソです）。では、本題に入ります。

今年3月。まだ記憶に新しいWBC。「憧れるのを止めましょう」あれです。大谷の名言。また、二塁打を打った大谷がベース上でチームを鼓舞するシーン。あれを夏の甲子園でも皆、真似してましたね。みんな大谷になりました

いんです。翌日の決勝では、皆、お昼ご飯の箸を止めて大谷VSTラウトの対決に見入ります。そして歓喜の瞬間。沸き上がる食堂！ムゲンが一つになった瞬間でした・・・それから1ヶ月。「メジャー大谷」に夢中になってるうちに暦は変わり、気付けば僕は六十になっていました。やれ物忘れた、坐骨神経痛だ、小さな文字が読めない、トイレもドンドン近くなる・・・59才と60才の違いに翻弄(ほんろう)されます。ようやく六十に馴染んだ頃、彼はやって来ました。壊滅的な大雨と記録的な猛暑を両手に抱え、僕を、ムゲンを日本を巻き込んで夏の到来。さあ、「どうするムゲン？」・・・エアコンフル稼働！「GO！」屋内組と屋外組に分かれて今日も仕事です。外組の僕らは古着回収、草抜き、水撒き。梅雨が明けたらいよいよ本番。炎天下の草抜きはさすがにキツイ。休憩は挟みますが、ガッツリ3時間。直射日光を浴びながらひたすら草を抜きまくる。大量に用意したアクエリアスがどんどん減っていく・・・はて？何かと似ている。汗にまみれてプレーする高校球児。そう、夏と言えば甲子園です。六月某日、野球好きの友人から一通のLINEが届きました。「佐々木君は、(ドラフトで)何球団競合しますかね？」佐々木くんとは、高校三年間で140本ものホームランを打った花巻東の佐々木麟太郎のことです。それから毎日の情報交換が始まります。「享栄高校のMAX152キロの左投手もプロ注目です」「東松クンですか？高校BIG3の一角ですね」「佐々木朗希の弟は、最速143キロです」「沖縄尚学の東恩納(ひがしおんな)はもっと速い」・・・なんてマニアックなLINE！注目選手の発掘が終わったら、「帝京高校負けました」「大阪桐蔭負けました」・・・強豪校の予選結果へ、第2ラウンドです。そして、「仙台育英高校、甲子園決めました」「慶応高校、甲子園決めました」舞台は聖地へ。四国勢3校が早々と消えた中、勝ち上がって来たのは夏連覇を目指す仙台育英と陸の王者・慶応。優勝候補・智弁学園や佐々木麟太郎擁する花巻東らをなぎ倒して決勝の舞台に招かれます。そして8.23「スター軍団」仙台育英が慶応の「エンジョイ・ベースボール」に屈します。大方の予想を裏切った「甲子園事変」。「美白王子」丸田というアイドルも生まれて、「野球好き」の夏は大いに盛り上がり、そして終わります・・・仕事の話に戻しましょう。では、屋内組の仕事とは？ムゲンメンバーの大半が集う「内職」。大きく分けて二つ有ります。「ホテルアメニティーの箱詰め&袋詰め」と「着物リメイク」。詰める物は、歯ブラシ、カミソリ、お茶、アヒルちゃん・・・ラジオから高橋真実子の「ファイン」が流れる中、淡々と作業が進んでいく。二十年以上も続く、ムゲンを象徴する仕事です。一方、「着物リメイク」は、着物をリッパ→でほどく→ほどいた着物を洗い、細く裂く→機織り機で織る(裂き織り)→バッグや服などに作り直す。そしてこの幾つもの工程を経て出来上がった

商品を売る・・・この「売る」という最終工程。どこで売る＝作業所で働く人なら一度は聞いたことがある、高島屋2階の「ハートフルプラザ」です。お菓子、手芸品、木工品など障害者が作った様々な商品を障害者が売る。一般就労に限りなく近く、「接客」という要素が求められる「プラチナ・ワーク」です。そしてもうひとつ。寄付していただいた古着をそのまま売る「もうひとつのハートフル＝ロハス」。知名度こそ劣るが、着物のたたみ方や素材など専門知識が必要とされ、お客様との距離が近い、限られたメンバーだけが任される店舗です・・・さて11時。内職と外での作業を終えたメンバーが手を洗って食堂へ。待っているのは極上の昼食です。トンカツ、カレーに酢豚、オムライス・・・普通に定食屋で出て来そうなハイレベルな料理に舌鼓を打ちます。さらに嬉しいのがフルーツゼリー、杏仁豆腐、チーズケーキなどの絶品スイーツ。お腹いっぱい、仕事の疲れも吹き飛びます。そして食べてすぐ帰る組(私です)と、1時半まで頑張る組。しっかり働いたら、自転車で、バイクで、送迎で家路へと向かいます。メンバーのほとんどは一人暮らし。孤独を楽しむ者、出逢いを夢見る者、家族を養い養われる者・・・それぞれの事情と希望を鞆(かばん)に詰めて。仕事だけではありません。この夏はドライブにも行きました。かき氷屋とブドウ狩り。かき氷は、いちごミルク、抹茶ミルク、河内晩柑(ばんかん)、ティラミスなど。1000円も高くない。堪能しました。旬のブドウを収穫&食べ放題、ブドウ狩りも盛り上がりました。メンバーのリクエストに応え、海へ、寿司屋へ(回る方)、バーベキューへ。西へ東へ・・・一年に何度かあるお楽しみ。昔はソフトボール、バレーボールなどのレクリエーション。たこ焼きづくりに餅つきなどもありました。歴史を重ね、進化してきた作業所ムゲン。

こんなムゲン、随時メンバーを募集しています。一緒に働きませんか？まずは見学から。予約してくれば、昼食も用意致します。コミュニケーションが苦手な方、多人数が苦手な方、仕事が出来るか不安な方、心配ありません。それぞれの事情を考慮され、自分のペースで皆、活動しています。あなたと同じ、障害者の集まりですから。ご連絡は、表紙に書いてある電話、FAX,メールで。木屋町が遠い方は送迎も行っています。不本意な夏を過ごしたあなた。変わりたいあなた。この秋、一歩踏み出しませんか？



パソコンでの作業はどんな内容か？

荒木和貴

2台のパソコン(1台は僕の所有するノートパソコン)で小さく始めていきたいと思います。僕はムゲンでお手伝いが出来れば嬉しいです。

ネット上の「e-typing」というサイトでタッチタイピング(ブラインドタッチ)に慣れて行く。キーボードを見ないで早く文字を入力できるようになります。(大丈夫、僕も苦手です！)

MOS(マイクロソフト・オフィス・スペシャリスト)のExcelとWordの教材を使って(教材は僕が持っています)、基本的なソフトの操作の取得を目指します。自信のある方は、ぜひMOSの試験を受けてみてください。勉強の方法は、画面を見てその通りの操作を行うものです。

クラウドワークスなどのインターネット上のお仕事サイトで、データ入力の仕事を受注して、作業をして、納品して収入となります。金額は大きくありませんが、コツコツとやった分だけ金額は貯まってゆきます。最初から大きな利益を上げようと思わず、毎月積み重ねることによって、気付いたら安定した収入になります。

僕自身は、病院の総務課の事務で、いくつかの種類のデータ入力などの雑用をさせていただいたことがあります。会社にとって、そのような作業をやってもらえるのはありがたいです。

また、ネットショッピングのサイトでの作業も、求められています。ムゲンでもminneというサイトで、お店を出していますが、商品の説明やサイズ、素材など、データ入力の作業と密接な関わりがあるというか、むしろそのものです。ついでに通販サイトの宣伝をさせてください。

<https://minne.com/@piamugen> ではムゲンで製作した裂き織り物を中心に、着物リメイクのお洋服など、ファッション商品の販売を行っています。どれも素晴らしい作品ですが、モデルさんのおかげで、ますます良い感じに

なっておりまして。今後は海外に向かって展開をしていきます。

さて、具体的な作業の内容は、受けたお仕事により少しずつ違います。ただ、たいいていの場合マニュアルがあり、問い合わせる事が出来るので、慣れれば難しくありません。

パソコンとずっとにらめっこの、データ入力の作業は、正直結構、肩がこって疲れるかもしれません。ストレッチや太極拳など、簡単な運動を挟みながら、水分補給して行うのが、無理なく良いと思います。ゆくゆくは自分自身のパソコンを使って、出来るようになると良いですね。それでは、これからよろしくお願いいたします！

内職

中村優

私が内職の作業をする時の特徴は2つある。1つ目は遅いことである。とにかく遅い。コットンなどを詰める作業でも、グルーガンを使うガン止めの作業でも、シーラーを使って袋を圧着させる作業でも…。とにかく遅い。10年近くムゲンでお世話になっているのに、いまだに遅いので、半分諦めた。諦めて「これが私の精一杯」と開き直っている。だが、半分は諦めたが残り半分は諦められないので、悪足掻きをしている。それはタイムトライアルだ。1箱とか1段とか区切りをつけてどのくらいの時間でできるか試したりしている。時間を意識しつつも、作業の質を落とさないように。焦って失敗しないように気をつけながらひたすらに作業しているときがある。誤差の範囲かもしれないが、5分くらい縮まっているときがあるので、微々たる成果だがたまに、密かにやっていたりする。あとしていることは、地道に作業に使う材料や道具の配置を変えてみたり、やり方を変えてみることだ。職員さんにこのやり方でも問題ないか確認してから行っているが、独特過ぎて私以外は誰もやらないやり方だったこともある。それはインターゲートと呼んでいた種類の内職なのだが、この作業だけは実は得意だった。黒ゴムなどが入った袋に化粧水などの小袋を6枚均等に並べて動かないようにしてたたむ作業だ。この作業ではみんな化粧水の小袋は正面を向けて置いていて、そこから1枚ずつ取っているのだが、私は90度回転させて横向きで置いていた。その方が私にとっては取りやすいのだ。他にも化粧水を並べるときには机に置いた状態で並べるのがやりやすいようなのだが、私は手で持ち上げた状態で最後だけ机に置いて並べていた。このように

他の人たちとは違うやり方をしていたのだが、他の作業ではあまり自信が持てない私が、この作業は速さも正確性も人並み以上に出来ているのではないかと思え自信がもてた。2つ目の特徴は、見つけてしまうことだ。職員さんよりも先にコレはいいのかなと小さな汚れなどのイレギュラーを見つけてしまう。1つ1つの商品を隅々までじっくり見ているわけではない。むしろ全体をぼんやりと見ている。さっと裏表を確認しているが、やたらと目について見つけてしまう。見つけてしまったら仕方ない。除けておいて職員さんに確認する。そして選別してもらうのだが、その量が多いときがある。だが、見つけたら気になるし、確認したほうが安心なので、イレギュラーがあればとりあえず除けておく。以上のような特徴がありつつも、半分諦めて半分悪足掻きをしながら、内職の作業をしている。これでもムゲンに通いだした頃よりは作業のスピードは速くなっているらしいので、年単位の長い目で「もう少し速くならないかな」と思いながら悪足掻きは続けようかと思う。

「22年ワールドカップ」に魅せられた女子高生・青原ミルクは、担任の勧めもあって親友のマリネとサッカー部に入る。「冬の選手権」で注目された二人は「U-18日本代表合宿」に呼ばれる。同じく招集された真樹(MF)、バニラ(GK)、レオン(FW)らライバルと共に成長して行く二人。さらにインターハイで男子を上回るポテンシャルを評価された5人が、揃ってヨーロッパのビッグクラブにスカウトされる。マリネ(リアルマドリード)、真樹(ユベントス)、バニラ(マンチェスターU)、レオン(ACミラン)、そしてミルクは5億×5年契約でスペインの強豪「FCバルセロナ」に入団。世界を席巻する5人の快進撃が始まる。

「蹴球女子・ファイナル」

突然ですが「カンテラ」って知ってますか？「関西テレビ」じゃないですよ。それは「カンテレ」。美味しいですよ～一六本舗の・・・それは「カステラ」！カンテラとは「スター軍団」FCバルセロナの下部組織。トップチームへ上がるための育成の場です。プロ野球の二軍、あるいは「虎の穴」。もしくは駿台予備校。狭き門をくぐるべく、サッカー漬けの毎日。読者の皆さん、青原ミルク頑張ってます。朝6時、同部屋のルミル(デンマーク出身)に起こさ

れ、早速練習開始。でもチーム内で女子は2人。特にスタイルのいいルミルはセクハラの標的に。傷つき、デンマークに帰るルミル。「ミルク、今までありがとう。実力もないし、親の仕事を手伝うよ。」私は学長に直談判。「ルミルはセクハラで辞めたんです！」「それが？」面倒くさそうにタバコを吹かす学長。「よくあることだ。あれくらいで辞めるようなメンタルじゃ、トップチームへは上がれないよ。なんならアオハラも辞めていいぞ。お前の代わりならいくらでもいる。」孤立するミルクに近づいたのは、イケメンDFデルナーデだった。恋に落ち、たくましい腕の中で大人になったミルク。だが、ミルクばかりかルミルにも手を出していた札付きのプレイボーイ。「最低！」傷心のミルクは、バルサを離れる。

そんな私を誘ってくれてたのがイタリアの「ユベントス」。プラティニ、ボニエク、バッジョ、ジダン……そうそうたる名選手を輩出して来た白と黒の縦じま。だがハードタックルでも知られる「セリエA」。一気に選手生命を失う危険性も。答えが欲しい私は、地元トリノで「ユベントスーACミラン」を観戦。地鳴りのような声援と発煙筒。テレビで観るのとは全く違う、その迫力に圧倒されます。成長した真樹(ユベントス)とレオン(ACミラン)。そしてイタリアサッカー。1分に一度、笛が鳴る。ファウルの応酬。倒されて、また立ち上がり膝に手を当て走り出す。主力の真樹とレオンは、より激しく削られる。しかし、思ってた以上にレベルが高い。汗びっしょりの拳を握りしめて、二人の姿を、闘う姿を自分と重ね合わせる。「この中で私がプレーすれば……？」寒くなる背筋と熱くなる心。イタリアで、私も闘いたい。1ゴールずつ上げた二人のプレーを目に焼き付け、翌日、契約書にサインした。「4年10億」。何一つ実績の無い、「バツイチ」の私に、オーナーは、破格の条件とボニエクのつけていた背番号「11」。そして何より一軍デビューのチャンスを与えてくれた。

デビュー戦。いきなり「セリエA」の洗礼。膝深くまで入る激しいタックルに体ごと吹っ飛ばされる。「痛—大丈夫か？私」何とか立ち上がると「ミルク！」キャプテンに呼ばれる。この新米にフリーキックを蹴らせてくれるようだ。一呼吸して怒りをボールに吹き込む。カーブをかけて後半20分の初ゴール。だが、マークがよりきつくなる。ファールまがいのタックルに膝が悲鳴をあげる。が、「負けない」。マリネ、バニラ、みんな闘ってるんだ。そして直後、真樹から絶妙なスルーパス(ヨシ来たー)。タックルを交わして2ゴール目。サポーターからの声援が痛みを癒してくれる。チームメイトも駆け寄り手荒い祝福。(こらこらだれかお尻触ってないか？)ユーベの一員になれた瞬間

間。さらに右サイドをドリブル突破。ゴール前で待つフレップにセンタリング。(あれ？私、上手くなってる)嫌な思い出しかないカンテラでの半年間が成長させてくれたんだ。(ルミル、見てる？)2ゴール&1アシスト。出来過ぎのデビュー戦。ヒーローインタビューに呼ばれる。「はじめまして、青原ミルクです」

2ヶ月が過ぎタックルにも慣れ、体も意識もイタリア仕様になってきた。そして、ヨーロッパでプレーする女子高生5人が日本代表として呼ばれる日がついに来る。初舞台・・・親善試合「日本ーデンマーク」。青原ミルク、鈴川マリネ、太田真樹、沢崎バニラ、高岡レオン。「なでしこ」ではない。5人揃ってフル代表のスタメンに名を連ねる。だがファンを驚愕(きょうがく)させたのは、ミルクでも、マリネでもなく16才のデンマーク少女だった。爆発的なスピードと破壊的なドリブル。鋭い切り返しから繰り出される強烈なシュート。開始5分でゲームの主演に指名されたルミル・フランチェスコ。(ルミル！)初代表で輝きを放つショートカットの美少女だ。2ー6。「ルミル劇場」を見終えた観衆は、新しいスーパースターの誕生日に立ち会えた幸運な5万人だった。そしてヨーロッパ中の強豪クラブがルミル獲得に手を上げる。しかし最高額を提示したのは皮肉にも、彼女が最も嫌うFCバルセロナだった。ミゲル会長は、「セクハラに関わった全選手を解雇してもいい」と断言。だが、ルミルが選んだのはフランスの「パリ・サンジェルマン」。エムバペとコンビを組んだ過去最強のパリSGは、この年ヨーロッパカップを制し、ルミルは初のバロンドール(世界最優秀選手)に輝く。

そして始まった2026年W杯ヨーロッパ予選。真っ先にカナダ行きを決めたのは、5戦全勝のデンマークだった。強豪ドイツをルミルの3ゴールで葬り去ったゲームは、「サッカー史の地殻変動」と称賛された。彼女は2年連続でバロンドールを受賞。また日本もアジア予選をトップ通過。屈強な男子選手にも向かっていく「ミルク世代」の女子選手は、サポーターの感動を呼ぶ。

6月、W杯開幕。「これがルミルか？」前回王者のアルゼンチンがデンマークに敗れる衝撃のオープニング。連覇を狙うメッシが予選リーグで姿を消す。さらにブラジルのロマネーラ、イタリアのファンシーニ。女子の時代はやって来るのか？新生・日本代表もノルウェーに快勝すると、続くウルグアイ、カナダにも勝って早々と決勝トーナメント進出を決める。日本、デンマークに続きブラジル、イタリア、フランスが順当に駒を進める中、「新たな発見」も。初出場・ケニア。「黒いダイヤ」ことムグダフィと抜群のフィジカルを

持つ12人。ヨーロッパ各国のスカウト達が最も注目するニューエイジだ。初戦クロアチア戦。41才のモドリッチを翻弄(ほんろう)するムグダフィのスピード。中盤が作ったチャンスを巧みなトラップからゴールに突き刺していく。ルミルと同年の少女が世界中から注目を浴びる。クロアチアを退けると、続く韓国、コロンビアも撃破する快進撃。5ゴールを挙げたアレファン・ムグダフィは大会の主演の一人に躍り出る。

そして決勝トーナメント。1回戦で早くも実現した大一番。日本対ケニア。決戦前日。スタジアムのカフェで偶然顔を合わせたミルクとムグダフィ。真っ黒な肌に愛らしい笑顔。「スラバヤ通りの妹へ」みたいな？)だが、靴ひもがほどけてる。裸足で草原を走るのが彼女たちの日常。靴と堅結びが苦手なよう。嫌な予感がミルクの肩を吹きすぎていく。

試合当日。(靴ひも靴ひも)スタメンから外れたミルクは、ムグダフィの靴ひもが気になって仕方がない。転んだら大変。キックオフ。早速ムグダフィがドリブルで仕掛ける。速い。DFを避け、あっという間にゴール前。GKバニラの股間を抜いて、開始2分のオープニングゴール。スカウト席がざわつく。2点目もムグダフィ。後方からのロングボールに圧巻のジャンプ力でヘディングシュート。ミルクがアップを始める。2点を取ってケニアはスローダウン。エノケ、サンデラ、マフィン。自慢の中盤がボールを回す。狩りに明け暮れる彼らにサッカーを教えたフランス人監督のジャッケル氏。プラティニ、ティガナ、ジレス。80年代フランスのような美しく奔放なサッカー。ゲームを支配して、前半を終える。後半、日本はミルクを投入。速攻から三苦のラストパスを落ち着いてミルクが流し込む。1-2。さらにミルクのセンタリングをレオンがダイビングヘッド。同点。そして、ムグダフィの突破をミルクが追う。「ん？靴ひも」トップスピードの中、ほどけた靴ひもにつまずき、転倒するムグダフィ。「大丈夫？」駆け寄るミルク。沈痛な表情。足首を痛めたようだ。担架で運ばれる今日の主演。背番号「12」が準備を始める。まだ若い。横顔に緊張とあどけなさが垣間見える。だが、世界がこの後驚嘆する。中盤からのパスを受けるとファーストタッチで二人の日本DFを置き去りに。「！」ムグダフィより速く、柔らかなボールタッチにアフリカの匂いがする。2分後、今度は中盤に一旦ボールを預け、再度パスをもらうと、一瞬でゴール前に。バニラを欺き、あっさりと決めて見せる。「？」スタジアムが静まり返り、一呼吸置いて大歓声に変わる。ステファン・ラムニダ。13才。ケニアが隠し持ってた、極上の秘密兵器。さらにマラドーナばりの五人抜きゴールで日本を奈落の底へ突き落す。2-4。だが真樹がイレブンを鼓舞する。「勝つんだ！」ラムニダへのパスを三苦が奪うとそのままカウンターアタック。最後はマリネ。1点差。ロスタイムに入ると、マリネとミルクの速攻

がハマる。タックルで止めに入るラムニダ。しかし簡単には倒れないミルク。残り5秒。飛び出したGKジャンナの上をフワリと越えるループシュートが決まる。「シャー！」吠えるミルク。再び追い付く。死闘は延長戦に。前半10分。ミルクから浅野へ。狙いすましたスルーパス。ペナルティーエリアでラムニダに倒される浅野。PK。若さが出たラムニダ。イエローカードをもらい、天を仰ぐ。この貴重なワンゴールをミルクが決めて5-4。日本逆転！ラムニダを中心に攻めるケニアだが、体を張って守り切り、ベスト16進出！そして親善試合から3年。ベスト8をかけて日本とデンマークが再び相まみえる。

車椅子のムグダフィ。弟分のラムニダも誘って会場近くの日本食レストラン。明日の飛行機でケニアに帰る二人。「もっとゆっくりしていけばいいのに。」アメリカで出来た親友に名残惜しそうなミルク。ラムニダの新学期が始まるらしい。「帰ったら学校のヒーローね。彼女はいるの？」褐色の笑顔に赤みがさす。「13才か。いいなあ。13才の私って何してたっけ？」不慣れな手つきで天ぷらそばを食べる二人に箸の使い方を教えるミルク。「美味しい？」そんなミルクを呼ぶ声。ルミルだ。白のTシャツ姿が眩い。このままファッションショーに連れて行きたいベストジーニスト。「君がラムニダ君？可愛い～」急にもじもじし始めた13才。「フーン」ルミルは顔を近づけ、あろうことかラムニダの頬に口づける。挨拶か？誘惑か？ファーストキスを奪われた少年は、興奮MAX。そばをのどに詰め、何度も咳き込む。伸び放題の天そば(ラムニダ君の初恋に乾杯。)

北中米を舞台にしたワールドカップ2回戦。「日本ーデンマーク」。日本にとっては雪辱戦だ。ルミルはFWだが、ポジションは流動的。ここまで9ゴール4アシストと絶好調の彼女に全権を委ねるマークハロン監督。だが、森保にも秘策が。

晴天のシカゴ。ルミル見たさで集まった5万観衆が、意外な光景を目の当たりにする。ルミルにピッタリと張り付く背番号「17」。お手本のような「マンツーマンディフェンス」。得意のドリブルは勿論、フェイント、切り返しさえ許してくれない。時間だけが過ぎていく。見たことの無いこのマンマーカーは一体・・・三年前。親善試合でデンマークに完膚なきまでに打ちのめされた森保ジャパン。三年後のこの対戦を予知したか？膨大なリストと格闘した末、森保は長野へ。サッカーJ3公式戦「AC長野パルセイロFC今治」を観戦。色めき立つ選手たち。J3の試合に日本代表監督が来てる。「お目

当ては俺か？」誰もが思う。だが、森保がここに来た目的・・・DF角倉旬(28才)。「マンマークディフェンスのスペシャリスト」だ。シュート力も無ければ、ドリブルも遅い。だが、一度相手FWに張り付いたらすっぽんのように離れない。この試合で確信した森保は即日、彼を代表に収集。そして非公開の紅白戦で、角倉は「仮想ルミル」に見立てたミルクを90分間抑え切った。そして目の前の試合でも、角倉のマンマークは前半終了時までルミルにシュート1本打たせてない。その間に日本は、ミルク、マリネ、レオンのゴールで3―0。後半に入っても、角倉のスタミナと集中力は失われない。切り返して突破口を開こうとするも倒されるルミル。だが、笛は鳴らない。「今のファウルでしょう！」苛立つ女王。ファウルすれすれ、角倉の神ディフェンス。それだけで食って来た男だ。そして彼女のフラストレーションは絶頂に・・・後半32分、全世界のサッカーファンが失望する。ルミルのヒジ打ちにもんどりうって倒れる角倉。走り寄るピーターズ主審。彼女に託したサッカーファンの夢も、4度目のバロンドールも、そしてデンマーク国民の悲願も全て一枚の赤い紙がさらっていった。「ルミル・フランチェスコ。レッドカードで一発退場！」――8―0。あっけないほどにスコアは開き、試合終了。ルミルとデンマーク代表の夏は終わり、ワールドカップから姿を消した。マークハロン監督は、スーパースター1人に頼り切った自らのサッカーを悔いた。そして4年前の忘れ物。日本代表は、ベスト8を手に入れる。

「バロンドール」・・・世界年間最優秀選手。サッカー記者の投票で決まる最高の名誉。近年では、2023年から3年連続でルミル・フランチェスコが受賞。そして2026年の受賞者は？絶対的候補だったルミルがワールドカップでの”大失態”で、大きく評価を落とす。浮上してきたのが、青原ミルク(日本)、ロベルト・ファンシーニ(イタリア)の二人。これから始まる準決勝「日本―イタリア」の勝利に貢献した方が今年のバロンドール受賞と伝えられている。もちろん、母国の勝利優先で闘う二人だが、「世界一の選手」の称号も欲しいはず。しかしミルクにはもう一つ燃える要素が。それは・・・

司令塔ファンシーニを中心に「ゾーンプレス・サッカー」を展開するイタリア。守備的に試合を進め、思惑通り0―0で前半を終える。後半、イタリアが選手交代。負傷したラヴェラーニに代わって新鋭DFアルベルト・デルナーデが入る。だが、これがミルクの闘志に火をつける。(恨み晴らさでおくべきか～)カンテラ時代にミルクとルミルをもてあそんだプレイボーイ。復讐を誓うミルクが右サイドをドリブル突破。デルナーデをかわしてゴール。10分後、今度はマリネと二人でカウンター。デルナーデのファウルを誘うと、角度の

無いところからFKをねじ込む。2－0。若干二十歳。期待のDFは、デビュー戦で2失点を喫し、わずか20分たらずで途中交代。代表からも外され、以降再招集されることは無かった。ミルクは自身とルミルの念を晴らす。この2点を守り切り、日本は決勝に進出。ミルクもこの2ゴールでバロンドラーに大きく近づいた。

サンバのリズムがスタジアムに響く。サッカー王国ブラジルが決勝の舞台にやって来た。ネイマール、シャリルソン、ジュニオール、マルキーニョス・・・豪華なタレントの中に、新エース・ロマネーラが控える。だが一戦ごとに力をつけて来た森保ジャパンは、この試合で新しい王国になる。中盤の真樹、久保、タルトのパスワークは冴えわたり、決定的チャンスが前線に供給されていく。両サイドの三笥とマリネの突破も攻撃にアクセントを付け、前掛かりのブラジルからミルク、レオンが面白いようにゴールを決める。さらに今大会ブレイクしたDF角倉がロマネーラを完封。6－0。新生日本は完全にゲームを支配し、ワールドカップを締めくくる・・・日本優勝。

「イエーイ」スタジアムから空港までお祭り騒ぎの貸し切りバス。金メダルを首に巻いた日本選手団。だれかれと歌い始め、さらにアルコールも入って「動く祝賀会」に。全員の頭にもうすぐ会える家族の顔がちらつき始めた頃、大惨事は起きた。見通しの悪い対向車線。トラックに気付くのが遅れたバスは、まさかの正面衝突。天国から地獄絵図へ。「救急車！救急車を呼べー」運転手は即死。選手たちも重症を負った。命からがら病院に搬送されたが、皆、自力歩行も出来ず、もちろんサッカーを続けることなどおおよそ無理な体に。ミルクも同じ。もう「ミルキック」は見られないのか？

「お母さんに私の気持ちなんて解からないでしょ！」やり場のない怒りを母親にぶつけるミルク。そして引きこもった。2週間、3週間・・・そんな気持ちをほどいてくれたのは、同じく両足を失った親友のマリネだった。「高速ドリブル」で一時代を築いたマリネ。サッカー部に誘ってくれた時と同じ。「ミルク、車椅子サッカーしない？」何もなかったかのように微笑みかける天使・・・そして2年後。「ウーン」「ガシャーン」電子音と弾むボール。そして車体同士の激しいクラッシュ。2028年ロサンゼルス・パラリンピック。電動車椅子サッカー。私を自暴自棄の世界から引き上げてくれたマリネ。感謝しかない。そして同じく葛藤から這い上がった真樹、レオン、バニラ、そして最年少のタルトから「ミルクさん、パース」。ボールを蹴るのは足ではなく、車椅子に取り付けられたフットガード。車椅子を回転させながらボールを捉

える。「ゴール。決まったー」「楽しいね」初戦「VSウルグアイ」。失った足が使えないもどかしさと、サッカーでは味わえない、アイスホッケーのようなスリリングな衝突プレー。マリネのドリブル突破。「高速」とは言えないが、さすがの個人技からミルクヘラストパス。「障害者になってまでサッカーしてるなんて、私らどれだけサッカー好きなんだろねー」笑顔の真樹。衝突事故と身体障害。二重のショックを乗り越え、再び日の丸を背負う。ミルクの父・青原プラティニ率いる「ガールズジャパン」はウルグアイを圧倒すると、イタリア、フランス、そして準決勝でブラジルを撃破。決勝の相手はデンマーク。まさか？いや、ないない。「ミルク。久しぶり」「ル、ルミル?!」赤いシャツに白のパンツ。夢じゃない。「本物」のルミルが私の目の前に。横断中の子供を車から守った代償。私と同じ痛々しい姿に。ポジションはFWではなく最後尾に位置する「リベロ」。守備陣を統率しながら、機を見て前線に攻めあがる。ラウセン、エルマードら期待の若手にピンポイントでパスを出す。車椅子姿になってもルミルはルミル、圧倒的だった。四国松山にあるミルクの部屋。誇らしげに飾られたワールドカップの金メダルともう一つ。26年度バロンドールの金のトロフィー。そして今回、目指すはもちろん同じ色。しかし、ルミルー人に頼らない闘い方で優勝したのはデンマーク。インタビューに答えた大会MVP。「タイトルは多い方がいい、誰にとっても。生きてるってことも、それだけで立派なタイトル」と胸を張る。そして、マリネが締めくくる。「死んでしまおう。消えてしまおう。何度思ったかわからない。でも私には痛みや苦しみを共有できる仲間がいる。コイツには絶対負けたくないと思える戦友がいる。どんなわがままも受け入れてくれる家族がいる。だから体がどんなにボロボロになっても生き続ける。」ミルクたちの冒険、第2章。今日も明日もボールを蹴り続ける彼女たちは、永遠に愛されるだろう。サッカーの神様に。

坊ちゃん育ち

佐野卓志

僕の父は長い間、県立病院内科の医長をしていましたが、僕が小学生の時に木屋町に3階建ての医院を建てて開業しました。その借金を返すために、ずっと必死で働いて家族を養ってきました。「死ぬまで医者として働きたい」と言っていました。僕の妹が「医療過誤を起こす心配がある」と強

引に閉院させ、90歳を過ぎて仕事を辞めてから、程なく亡くなりました。このことで父の望みを応援していた僕と、辞めさせた妹の間には、深い溝ができました。父の目標は105歳で亡くなった聖路加病院の日野原医師でした。

僕は付属小学校卒業後、男子ばかりの受験校である愛光学園で中高を過ごしました。両親は僕が医者になることを希望していて、レールを敷いてくれていました。期待されていた2代目の坊ちゃんでした。地元の学校には行かない、典型的な進学コースです。そのためずっと家の近所に、友人がいなかったです。そして母のやり方も「うちは医者だから隣近所とは付き合いはしない」ということで、地域のお祭りとかも、参加したことがなかったです。母は今では90歳をとくに過ぎていますが、疑り深く家族には暴力的だった昔とは真逆で、人を信じやすくなりいつもニコニコした猫好き婆さんに変貌しています。

愛光学園というのも、中高で人の入れ替わりがほとんどなく世間から隔離され、刺激のない受験校でした。高三になって僕はやっと医学部という進路に疑問を持ったのですが、美術の授業は高二までで終わり、音楽の授業は高一で終わっており、高三では毎日が受験科目だけでした。当時詩人のランボーとかが好きだったので、「フランス文学科はどうだろう？」とも思ったのですが、父から「英語を6年間やっても習得できていないのに、大学の4年間でフランス語を習得できると思うか？」と言われ、諦めました。人生を振り返り「大学など行かないで、布作りや染物、焼き物などの伝統工芸に入門して、職人さんを目指せばよかったなあ」とも思います。実際愛媛には、砥部焼の窯元があり、高校時代に「行ってみたいな」と思ったのですが、お勉強しか知らなかったのも、いきなり飛び込むのに躊躇もあり、受験の日々に流されていました。

中学の卒業時に「愛光は合わない」と言って公立高校にかわっていった同級生がいて、その行動力をとても羨ましいと思っていました。今南海放送で活躍している杉作J太郎は愛光の6年後輩ですが、劣等生で中学で退学になったと聞きました。ちなみに南海放送会長の田中氏は同級生で、高校時代から放送部で、昼休みに校内放送でDJをやっていました。

結局医学部を受験したのですが、乗り気でなくお勉強にも全く集中していませんでしたので、落ちて浪人しました。「当時やりたいことを十二分にやって、将来も好きな道が開けていれば、20歳でのあれほど重篤な統合失調症の発病はなかっただろうな」とも思っています。高校の卒業式を迎えても、何の希望もなく、「みんなの前で卒業証書を破り捨ててやろうか」と思っていて、自暴自棄な気持ちでした。しかし当時流行っていた高校紛争を恐れ

た学校側は、卒業式を中止にしてしまい、僕の計画もなくなりました。生徒の間でも自主卒業式と言うのを計画していて、近くの阿沼神社に集まり、自主卒業式をやったのですが、当時孤立気味だった僕には、同級生からの情報が伝わってなくて、参加できなかったです。

さて母は、歯医者のお嬢さん育ちで、人を信用しない性格で、お金だけを信じていて、世間や近所を敵だと思っていたようです。母や妹をずっと見ていて、「お嬢様のいく末は、拝金主義だなあ」と、思いました。そして、気に入らないことがあると、母は父や僕や妹を殴ったりして、僕も小さい頃には、躰として虐待され、母の顔色をいつも伺って育ったので、大人になり空気を讀むのがとても上手になりました。僕の奥様の波津子さんは、結構自由気ままなことする性格なのですが、僕を「忖度人間」と言います。僕は運転中とか、前後左右をいつも確認して、車間距離や後ろの車の様子などとても気にかけるのですが、波津子さんがは運転中に田舎道とかで「あ、きれいなお花が！」と急にブレーキをかけたりするので、僕は助手席で気を揉みます。僕は事故やトラブルになりそうだと思ったら、とにかく止まろうとするのですが、波津子さんは突っ張って突っ込んで行きがちなので、いつも強気なのです。テレビでリスたちが常に仲間で喧嘩ばかりして暮らしている様子を見て、僕は「波津子さんはリスのように無駄に気が強い！」と言います。僕は「虐待母の元で、顔色を伺いながら大きくなると、こういう性格になるのだ」と言います。よく言えば、人の心を思いやり、悪く言えば忖度をする性格です。

さて僕は高校の時に同級生の男の子が好きになり、ラブレターを出して、彼からこっぴどく嫌われてしまいました。それから僕はやっと自我に目覚めたというのか、チコちゃんに怒られて、ボーッと生きているのをやめ、勉強にも人間関係にも積極的になりました。しかしいくらお勉強を24時間やっても、東大に行くような人のいる50番代以内には一度も入ることはなく、またお勉強をすればするほど、もっともっと広い知識の世界が開けてきて、その無限さに圧倒され、自分の無知を思い知り、絶望して受験勉強もバカバカしくなりました。「自殺しよう！」と思いたち、父の病院の屋上に立って飛ぼうとしたのですが、相談した小学校時代の友人にも説得され、「つまらない人生かもしれないけれども、とりあえず生きてみよう」と妥協的に思い直し、やがて自殺願望は無くなっていきました。鬱っぽかったのかもしれないです。しかしそれらの挫折体験によって、今までの坊ちゃん育ちでは持っていなかった「敗けた人や弱者の立場に立った視点」で周りを見れるようになりました。子供の頃からテレビであった月光仮面や昭和のヒーローものは「強きを挫き弱きを助ける」ストーリーでしたから、「正義と

はこれなのだ！」と学んできていて、多分多くの僕の同世代と共有する価値観だと思います。僕は当時流行っていた、内ゲバが花盛りでもう落ち目になっていた左翼思想にも、遅ればせながらのめり込んでいきました。僕は貧乏人に味方する事が正しいことで、自分の裕福な坊ちゃん育ちを恥じるようになり、「贅沢は敵だ！」的な考えに変わって行きました。というか当時よく言われていた「若い時の苦労は、買ってでもしろ！」という言葉にも共感していました。

高校を卒業して東京の予備校に籍を置きながら、初めての一人暮らしをして、アルバイトをして仕送りを断って暮らすようになりました。将来を考えても、医者などで立身出世して、安定した地位を目指すということには興味がなく、「生きるに値しないこの社会を変えるべきだ、つまり革命が必要だ」と思っていました。

浪人の東京生活でのバイト続きの貧乏暮らしは過酷でした。パン屋さんでよくパンの耳をもらってよ食べていました。いつもお金がなく、質屋に時計やギターも持って行きました。高田の馬場駅前に、朝6時に多くの労働者とともに立っていると、手配師がやってきて、日払いバイトの代金などの条件を言って、「5名集合！」とかいうので、それに応募すると、ワゴン車で現場まで連れて行ってくれます。電車で行くときには、電車賃が出ます。仕事内容は、現場の後片付けとかです。あるときに雨で仕事が中止になって、土建屋社長の元にバイトが集まり、団交のような形になり、結局帰りの電車賃プラスバイト代が出ました。多分団交を主導したのは、運動経験のある活動家だったろうと思います。しかし肉体労働だけで食っていくのは、運動部経験もないひ弱な僕には、とても無理でした。朝になると、体が嫌がるようになり、休みがちになったので、体の楽な喫茶店のバイトに変わりましたが、これは結構長続きがしました。

無理がたたたり、やがて真っ黒いうんこが出るようになり、下宿の階段で倒れて、救急車で服部胃腸科に潰瘍で入院しました。その息子が学内封鎖を企てたとの罪で愛光学園を中退させられた、日本医大の学生で、赤ヘルの活動家だと聞いていたので、退院してから足繁く彼の家を訪問するようになりました。あんまり頻繁に来るので、あるときに彼は「お前はホモか！」と言いました。傷ついた僕は泣きじゃくりながら、人目もはばからず電車に乗って、下北沢の下宿に帰ったことを、覚えています。

また法政の中核派の人とも知り合い、幡ヶ谷の下宿に足繁く通ったこともあります。彼もホモを疑ったようで、彼自身の女性との思い出を語りながら、こちらの反応を観察していた感じでした。彼は最後まで「ホモだろう」と言わなかったですが、僕は活動家のお話がとても好きで聞いていました。

彼は「自分の下宿に来るときには、革マルの尾行には気をつけろ」とよくいっていましたが、両派は骨肉の内ゲバ中でした。中核派というのはとっても肉体派で、機動隊にとにかく突っ込むのが常で、硬派な感じでした。革マル派の方は「今は革命の時ではない」として中核派のような跳ね上がりを成敗するのが、使命だと思っていました。でも僕はどうしても「革命を目指す仲間同士が殺し合う」ということが理解できなくて、最後まで活動家にはなれませんでした。相手セクトの活動家を拉致して、拠点に拉致しリンチして、自己批判書つまり「私の考えは間違っていました」という書面を書かせて、自派の機関紙に載せて、自派の正当性をアピールしていました。

もしも父の時代、つまり戦時中に僕が青年期を迎えたなら、果たして獄中での特高の拷問に耐えて「戦争反対を言い続けたらどうか？」と思います。拷問で獄死した人も多かったですが、転向した人も多かったのです。政府は「転向声明」を大々的に宣伝して、戦争の正当性をアピールしたし、僕も多分、転向組だろうなと思います。いや「大東亜共栄圏」などという軍国主義の思想にかぶれ、軍国少年の道を歩んだかもしれないとも思います。現実にはしっかりと根を張っていない「坊ちゃん育ち」の弱さです。今ネットスラングで「わからせる」という言葉があり、「暴力や性暴力で思い知らせる」わけですが、生半可な「人権意識」の届かない闇があります。香港民主化の若き活動家の周庭さんは日本語で「決して黙らないでください。香港の現実を世界に知らせてください！」と言い続けたのですが、1年近く服役して出獄してからは、一言も喋らなくなりました。多分獄中で「わからせられた」のだらうと思います。

新左翼は「正義のために暴力で議会主義を否定する」という考えを日本にもたらしたと思います。やがて機動隊と殺し合い、仲間同士でも殺しあうようになりました。今はネットで弱い者を誹謗中傷して、皆でリンチするのが花盛りで、自殺者も出ていますが、この暴力はもともと新左翼の内ゲバがもたらしたものだのではないかと思います。最近は草の根ファシズムとしてネトウヨが登場して、「日本の兵隊さんが、悪いことなどするはずがない」という結論ありきで、日本の戦争の歴史を書き換えていく、歴史修正主義の運動が盛んになりましたが。右翼の活動家は国連まで行って訴えたいらしいですが、もちろん国際社会で歴史の修正など相手にされるはずもなかったです。しかし日本国内での影響は大きくマスコミや世論は戦争容認、軍備増強への傾斜が強くなってきています。日本は世界から遅れている人権の分野などで、他の先進国に追いつこうとするのをやめ、安倍政権以来先進国であることから降りて、80年前の戦争を理想として退行していく。ガラパゴス化に舵を切りました。これも新左翼が暴力というパンドラの

箱を開け、右翼勢力が逆に元気になっていった気がします。

僕らの世代の若い頃、若者文化の分野でも新しいことに挑戦する人が次々にあられました。今の世代には全く継承されてはいませんが、つげ義春だとか赤塚不二夫だとか、漫画をとことん芸術的にあるいは実験的に、前衛的に描くことが花盛りでした。また戦争を知る人達も、敗戦による価値観の大転換の経験を元に、多くのリベラルな哲学者や文学者が育ち、戦後民主主義を引っ張っていきました。でも今では誰もその名前すらしないのです。大江だけは最近、ノーベル文学賞をとり話題になりました。大島渚の「愛のコリーダ」のわいせつ裁判だとか、表現の自由を実現するため、多くのアーティストが、確信犯的に警察の取り締まりに挑戦していましたし、日活ロマンポルノが、下着をつけていなかった容疑で、警察のガサを受けた時代です。「やがて将来は欧米並みの性器の表現も可能になるだろう」と思ったものです。しかし今も規制は変わることなく、欧米に対してはHENTAIと呼ばれるロリータコンテンツを広く提供しています。

今人権の分野で気を吐いているのが、右翼のバックラッシュと戦っているフェミニスト達です。男性達はフェミニストを中傷し、女性車両に乗り込む運動だとか、性犯罪の厳罰化に「冤罪を生む」として反対したり、DVから逃れてきた女性を匿うシェルターの住所を暴いて公開したり、「それは男として最低だろう！」と思うような活動ばかりやっています。ニューズウィークとかで海外に報道され、国際的な恥さらしだと思いますが、彼らは「女性強いので、弱者男性として、フェミニストと戦っている」のだそうです。でも男は鍛えてなんぼだと僕は思っていますが、この男性達は多分「一生女性に好かれることもなく、童貞のまま終わっていくのだろうなあ」と思います。フェミニストの活動の広がり、日本が貧乏になって行き、専業主婦がいなくなり共働きが当たり前になって、男女平等思想が社会に広がり、男も家事をするのが当たり前になったという時代背景があります。

もともと男性が弱いのは誰もが感じている事で、多くの男性は女性に逆らわない、つまり「尻にひかれる」事が家庭の平和維持になると思っています。男尊女卑は昔の話で、昭和の時代の女性差別が忘れられないおじさんたち、特に政権の保守政治家とかが宗教団体などと手を携え、昭和の時代を復活させようと努力を続けています。女性はもともと出産に耐えられる頑丈さがあるし、赤ちゃんが生まれた瞬間から子育てするために頭の中もとても現実的です。昭和の男には、「男のロマン」だとか「ダンディズム」だとかありましたが、自己満足でしかなかったです。Y染色体は生物学的にもひ弱らしく、「遠い将来には男は滅びるだろう」と言っている生物学者もいます。男が弱い現実が認められないと、DVとかに走るのだと思います。

今は「多様性の時代」だと言われ、「鍛えたり成熟したりもしなくてもそのままでいい」という考えが広くあり、「成熟しない人が増えている」気がします。誰もが通ってきた通過儀礼である失恋とかの失敗体験をしていない人が多い気がします。僕の若い頃には平凡パンチやプレイボーイという週刊誌が、「20歳までに童貞など捨てるべき」だと言っていて、当時の若者の常識でした。僕は童貞のまま九大精神科に長く入院をしていて、随分と童貞コンプレックスに悩んだものです。福祉大国として知られるスウェーデンも、当時は性の解放されたフリーセックスの国として報道され、憧れる人も多かったです。週刊誌は100人斬り、1000人斬りなどの記事など競うように報道し、女性も解放的になり、「女性はお嬢様がいい」というような男性側の処女信仰も無くなっていきました。神田川や同棲時代という歌も流行り、カップルになればまず同棲するのが当たり前でした。でも活動家などの間では、警察などとの緊張関係もあり、禁欲的な人もかなりいました。当時フランスのリベラル思想家であった、サルトルとボーボワールのカップルは「お互いに性的にも束縛しない」と宣言して、「理想のカップルだ！」と若者の間でも賞賛されましたが、今考えれば、男は多くの女性に種付けをする傾向があり、女性は一人的男性と子育てをする傾向があるので、「女性に一方的に不利な考えだな」と思います。実際日本のアナキスト大杉栄も同じことを公言していましたが、神近市子さんに刺されました。ジョンレノンとは「イマジン」という曲で「国境なんてないと思ってごらん」と、愛国主義の虚しさを歌い、オノヨーコとベッドで抱き合って、「みんなが恋人とベッドで抱き合えば、平和になる」と記者の前で訴えました。ベトナム戦争もアメリカの敗北で終わって、反戦世論も高揚感がありましたし、ベ平連などは、米兵の脱走を組織的に手伝っていました。しかしイマジンは9.11の後に、アメリカのラジオで放送禁止になりました。アメリカ国中で復讐心が燃えていた時期で、しかも歌詞にあった「天国も地獄も宗教もない」が、キリスト教保守派の反発にあったようです。イギリスでも湾岸戦争の時には、自粛すべき歌に指定されました。日本では宗教心が薄く、癒される歌として中学校の教材になっています。

しかし現在、日本では、若者は「女性と付き合ったことないです」と堂々と言って、童貞であることのコンプレックスなどないようです。初体験での失敗を恐れたり、デートするも面倒だ、あとコスパが悪いと考えて、おつきあいを控える人も多いようです。昔デートというのも、多くは男性側が考えて、「段取り能力」を鍛えました。引越し時なども、運転できる人を探し、手伝ってくれる人に声をかけて、「晩飯奢るから手伝って！」と全て手配したのですが、今は引越し屋さんが全部やってくれて、本人は何もしないです。す

ぐに連絡の取れる携帯も子供の頃から使っていて、昔のように「気になっている女性は今何しているだろう？」などと想いを膨らませることもなくなり、相手の家に電話して本人に取り次いでもらう緊張感もなくなっています。恋愛は想像力を鍛える重要な機会だと思います。一般的に「失敗体験」をする事で現実を知り、生きる知恵がついていくと思うのですが、今はとても便利になって、失恋などの失敗体験をすることがとても減っています。自分を振り返っても、失恋体験で、一つ大人になったような気がしています。男子校に6年いた僕は、当時女性の知り合いを作り、お友達になるために、出たとこ勝負でコミュカも鍛えていきました。女性の前で何か喋らないといけない事態に、頭が真っ白になり、相手から「その話題はさっきも聞いた」などと何度も言われました。そういう意味で携帯やパソコンで完結してしまう今は、鍛えられる機会も減って、昔よりも退化しているのではないかと思います。ヴァーチャルやAIの進展で、将来ますますみんな大人にならなくなっていくと思います。

チャットGPTの登場も、外国では仕事を失う人たちが、ストをしたり規制を作ったりしているのに、日本は野放しで、全くのんびりです。放っておけば、保守政治家たちも世界に誇っている、日本のアニメ文化だって、簡単に崩壊してしまうかもしれません。

さて昭和の日本男性は、当たり前にも女性に身の回りの世話をしてもらって、自立できていませんでした。それが男女同権意識の高まりで、男性も自立を求められています。今流行している愛国主義だの2次元巨乳ロリ好みなどは、自立したくない男たちの現実逃避だと思います。円安を利用した外国からの観光客が日本に来て、アダルトショップに入り、店一面にロリータコンテンツが溢れているのを見て、仰天するそうです。日本は変態にもおおらかですが、性虐待についてもおおらかな国だと、ジャニーズや伊藤詩織さんや、自衛隊での五ノ井さんの件などが、立て続けに海外で報道されています。トランプ現象とか陰謀論、フェイクニュースの流行も、「現実を見ろよ！」と言いたくなりますが、実は僕だって、現実を直視するのは辛いことです。首根っこを掴まれて「現実をよく見ろ！」と言われなければ、僕だって夢を見続けていたいのです。でも失敗体験は否応なく現実と直面させられます。だから失敗体験の少ない、僕のような坊ちゃん育ちの人たちは、現実を知らないのです。

成田悠輔とかというコメンテーターが「高齢者は集団自決すべき」などと発言があったようなのですが、降ろされるでもなく今もテレビで人気者らしいです。飛び級で進学した秀才だそうですが、いくら頭が良くても飛び級は良くないです。多くの学生はお勉強をするためではなく、友人に会うため

に学校へ通っています。同級生との体験、特に十分な失敗体験をすることなく社会に出ると、結局未熟な判断をしていくだろうと思います。特に頭のいい人は、自分の中だけで完結する、完璧主義から抜けられないことが多いと思います。社会性や倫理観に欠ける、例えばマッドサイエンティストを生むことにもなりかねないと思います。今の日本では知恵者の長老だとか、重鎮だとかは、まずいませんし、培ってきた伝統の技を身につけた職人も減んでいます。今の若者と年寄りとは、コミュニケーションがなく、世代間で対立していると言われている。

僕の若い頃には「障害児も普通学校へ！」という運動が盛んでした。養護学校が全国にできて、「障害児は、みんなから切り離して、専門教育をすべき」と言われていましたが、「そんなことをすれば、障害児はますます社会性を身につけられなくなる！」という運動で、「学校に行くのは友人と会い社会性をつけるためだ」という考えです。世界的にもこういう障害児の人権は当たり前になっていて、日本も国連から「特別支援学校(養護学校)は人権上よろしくない」と言われていますが、政府はずっと無視しています。

昔の民主党の事業仕分けで、蓮舫議員が「スパコンは世界一でないといけないのですか？」と仕分けの場で言ったときに科学者たちは「当然世界一でないといけないです！」と口を揃えました。普通の人なら一位だろうと二位だろうと、性能はそう変わらないだろうと思いますが、「一位でないといけない！」と言う科学者たちは、自分が坊ちゃんのエリートであったと思います。坊ちゃん是一位がとても好きなのです。

今の政治の中枢には坊ちゃんばかりいます。政治家の親の地盤をそのまま引き継いで、苦労なく政治家になってきた人たちです。ドブ板選挙といって、「自分に一票を入れてくれる人を獲得するには、どうしたらいいのだろうか？」と、庶民の気持ちを必死に考えてきた昔の政治家たちは、消えていっています。今の坊ちゃん政治家たちは育ちが良くて、庶民の暮らしを想像できず、見当違いの政策ばかりを打ち出してきています。例えば、河野太郎は、「ブロック太郎」と呼ばれ、SNSで自分を批判した人を探して、残らずブロックしています。若者に人気の次期総裁候補らしいのですが、自分の批判を許さない人間が日本のリーダーになれば、必ず独裁的になるだろうと思います。でもマスコミは彼の自分の誤りを認めない弱さを「突破力！」などと呼んで賞賛しています。決められない政治は批判される今の空気が、「独裁者待望論」になっています。坊ちゃん政治家たちは、「戦争って勇ましいじゃない！」とばかりに「中国に沖縄を取られる！」などという被害妄想に駆られて、アメリカの後ろ盾の元に、軍事予算を増やして

います。アメリカの中国敵視政策に逆らうことは、日本ではできないことになっています。先制攻撃も空母の保有も構わない、つまり「戦争を仕掛けてもいい」と、言っています。さらには「戦争は絶対反対だ！」という強い野党もないのです。日本は秀吉の昔から、大陸に野心を持って、今まで10回以上も侵略しているので、今の保守派たちも、「大陸に領土を持ちたい」とまた考え始めているのだと思います。大正の自由民権運動が盛り上がった時代から、昭和の戦争の時代へと急転直下していった期間はとても短かったですが、僕の若い頃の平和主義から大きく空気が変わった現在にとってもよく似ていると思います。タモリさんも「新たな戦前だ」とテレビで言っていました。

最近の汚染水報道ですが、協定でもあるが如く、すべてのマスコミが「処理水」と報道し、中国は非難するという論調です。まるで大本営発表のようです。別に「汚染水」と言っても科学的に間違っているわけではないと思います。長い間、そろってジャニーズ批判をタブーとしてきたマスコミの姿勢は変わらないようです。これでは「政府は、なぜ海洋放出を選択し、その選択は成功だったか？」というマスコミによる検証も、ないだろうと思います。

「愛国主義はならず者の最後の拠り所である」という言葉があります。中国でもどの国でも愛国主義を鼓舞するのは、統治の常套手段ですが、社会主義の国で愛国主義という右翼思想を鼓舞し、国内の異論を恐怖政治で弾圧する手法は、「スターリン主義」として世界中の左翼から厳しく批判されてきました。自由と人権を掲げる市民派を弾圧した中国の天安門事件や、香港民主派を一掃した今の中国政府は、独裁国として世界の敵になってしまったです。「自由と人権は放っておくとすぐになくなってしまい、戦わないと権力に潰されるのだ」と香港のドキュメンタリーで言っていますが、「そうだな」と再認識をしました。今の日本のありえないような投票率の低さが、自民党タカ派支配の支えです。「愛情ホルモンオキシトシンの、家族を守る働きが、戦争に向かう」という最悪の形で働いているのだと思います。沖縄県に次々にミサイル基地を作れば、有事にはミサイル攻撃が集中するに決まっています。80年前に「沖縄は本土防衛の捨て石に」と言われましたが、今の日本は沖縄戦を繰り返そうとしています。

長かった安倍政治も僕には「わがまま放題で周りのフォローに助けられて、坊ちゃんとして育ってきて、リーダーになっても周りの忖度に助けられ、わがままを満たすことが当たり前になっていた」ように見えます。もともとひ弱な育ちの坊ちゃんですから、プーチンとかの強い独裁者にはなれっこないですから。50回もプーチン詣でをして、マスコミは「明日にも北方領

土が帰ってくる」と報道しましたが、経済協力の約束をさせられただけでした。多分80年前の戦争の時代のように、無責任で誰も責任を取らない形で、日本は戦争に突入していくのだろうと思います。当然基地の集中する沖縄は再び最前線になるだろうと思います。東京オリンピックも止められなかったし、バブルの遺物のようなリニアも止められなかったし、大阪万博も多分止められないだろうと思います。このように誰も責任を取って止めない日本は、ちょっとした国境紛争で、無責任な戦争を始めるのだろうと思います。坊ちゃん政治家達は一時「カジノで儲けよう」と言っていたが、「戦争で儲ける方が確実である」と考えているかもしれません。

さて若い人はNHKが嫌いで、NHK党までできていましたが、まあ確かにNHKニュースは忖度だらけでヘタレですが、BSを中心としたドキュメンタリーはとてもレベルの高い作品群です。歴史を知らない人たちには、これらの作品をたくさん見て欲しいと思います。沖縄戦のドキュメンタリーも随分見ました。沖縄の日本軍は住民の服装で戦ったので、アメリカ軍は民間人も区別なく殺すようになりました。南下してくるアメリカ軍に対し、日本軍は司令部を沖縄の最南端に移して、住民を盾にして隠れたので、住民の甚大な被害を招きました。ガマという洞窟に避難していた住民には日本軍が自決用の手榴弾を配って、各所で住民の集団自決が起こりました。久米島にアメリカ軍はこなかったのですが、日本軍からスパイだと疑われた住民が殺害されていきました。「森に避難しろ」と命令された住民たちはマラリアにかかって、亡くなっていきました。沖縄の反基地感情はおじいさんやおばあさんから直接聞いた沖縄戦が元になっています。決して自民党の議員さんのいうように、左翼新聞に洗脳されているわけではなく、「戦時、軍隊は住民の命を守ったりはしない」と肌で知っているのです。「沖縄基地反対デモには中国から金が出ていて、バイト代が配られる」という右翼のフェイクニュースが流れ、「それを信じた本土の若者がバイト代目当てで参加したのに、バイト代が出なかった」というニュースを聞いて、あまりの若者の無知に悲しくなりました。

隅々まで資本主義の浸透した社会で育った若者には「コスパ」が最高の価値のようですが、「人は金で行動するわけでは無い！」というのが僕ら昭和の時代の価値観でした。テレビニュースでは「経済効果」だとか「国益」だとかお金の話をよくいうけれども、「金の話ばかりするな！」と思ってしまいます。多くの被害を受けた人たちが声をあげて国を訴えたりするけれども、「結局金目当てでしょう」と言われています。僕には金だけで動く人を軽蔑する気持ちがありますし、高齢者も同じように感じている人も多い気がします。

人との付き合いで、すぐに無距離になってしまうのは、統合失調症者共通の特徴だと思うのですが、自分と他人とは、全く違う、自分と他人との境界線を十分に認識できていなくて、とても人懐っこいのです。さめた目で人との距離をとっていないので、それで「ホモだろう」という感じにもみられてしまいます。もちろん実際にホモなのかもしれませんが、女性とは、嫌われないように遠い距離を保つのですが、同性間ではついべったりとひっついてしまいがちなのです。そのため傷つきやすくもあり、緊張感が高まると、自分の中の劣等感から、他人の動作の端々に敵意を感じてしまって、発病に至り、幻聴とかが始まるのだと思います。でも他人と一体感が持てていると言うわけではないので、基本的に統合失調症者は、誰とも繋がりが持てず「寂しい」という悩みを抱えています。この「寂しさ」は僕が集まる場としてムゲンを設立した原動力にもなりました

僕の育ちが、虐待的な環境であったので、自我が強く育つ時期に、母からの解放されることを目指して、自由になることを目指して、いきなり仕送りを断りましたが、主治医の三好先生は「ロケットを噴射しすぎて、宇宙にまで飛び出してしまった」と言いました。母はといえば、とっても僕を愛していたと思います。だから育て僕が離れて行こうとすると、全力で阻止したのです。高校で「寮に入りたい」と言ったのを阻止し、うちに届いた女性からの手紙も破りました。中学時代にオナニーを覚えた頃、僕はよく週刊誌のヌードグラビアを集めて隠していました。母はしばしば僕の部屋を探しまわって、ヌード写真を見つけては、突きつけて「お前は墮落した！」と責めたので、僕のマゾな性癖の原点になりました。高校の時にも同級生が連れ立ってお昼にお好み焼き屋に行くのが羨ましくて、「お弁当は作らなくてもいい」と何度言っても、作ってもたせました。多分その後に「母の作る食事には毒が入っている」と思うようになって、近く中華ばかり食べに行くようになりました。高校時代から多分妄想があったのだと思います。母は「僕が大きくなって家を出て行って欲しくなかった」のだと思います。僕には徐々に実家から距離をとっていくこともできず、東京に出て仕送りを断って、実家といきなり断絶しました。しかし当時流行っていた「世界革命」を真に受けてしまった若い時代はいかにも世間知らずでした。連続企業爆破で死刑判決を受け、獄死した大道寺将司さんが、「これだけは読んで欲しい」と獄中から呼びかけた本は、松下竜一さんの「豆腐屋の四季」でした。革命を叫ぶ若者に、「君たちはコツコツと地味に生きている生活者の気持ちが本当にわかっているのか？」と呼びかけたのです。

さて浪人の次の年には北里大学医学部に合格しましたが、駐車場には外車の並ぶ、いかにも坊ちゃんが集まっている大学という感じで、初め

から違和感がありました。ロックの部活に入って、高校時代からやりたかったドラムを始めました。毎日部室に入り浸って、授業にはほとんど出席しませんでした。誘われて、イトーヨーカ堂のビアガーデンのステージ演奏もやりました。大学の定期試験も受けなかったので、留年しました。2年続けて留年すると退学なので、僕もロックの部活をやめて、家からの仕送りもお願いして、授業に出るようにしました。しかしクラスのみんなとの疎外感は大しくて馴染めず、だんだんと下宿に引きこもるようになり、登校もしなくなりました。夜になると、下宿を出て新宿渋谷方面を一晩中めちゃくちゃに歩き回るようになりました。幻聴も聞こえ始めて、幻聴のいいなりに、右へ行ったり左へ曲がったりして、すれ違う人も悪口を言って通り過ぎて行くと思っていました。

最近幻聴に対して、怒り返す患者を見て、びっくりしました。その気の強さと比べて、僕はサンドバッグのように黙って幻聴を受け続けたのです。病気に性格が反映するのだと思いました。

僕は下宿で朝までまんじりとししないで、悪魔の大戦争を経験し、悪魔の子を出産していました。ある日、同郷の友人が訪ねてきて、僕の惨状を見つけ、父に知らせて、父が飛んできて連れ帰り、しばらく松山精神病院の外来でお薬をもらっていましたが、埒があかないので、父の出身の九州大学精神科が開放治療で有名だという理由で、5年間の入院が始まりました。学友の皆さんは地道に進級していき、目も当てられないほど夢見がちだった僕は、現実には敗けて入院しました。

振り返り思うのは、陽性症状というのは、若い時だけで、だんだんと年月と経験を重ねて現実的な見方に変わってきて、うつ病に移行するということです。陰性症状が長く続くと医学的には言われていますが、実はお薬に拘束されて元気がない状態が続くのだと思います。お薬をどんどん減らしていくと、ストレス時にうつ病が現れるようになると思います。僕も今まで繰り返し寝込んできました。

伊予市の精神病院に長くかかって統合のお薬をずっと飲み続けていた人が、三好先生に変わってから、どんどんとお薬が減って、今ではゼロになったという人を知っています。本当に元気が出て、健常者と変わらなくなっています。びっくりな話です。

歳をとって、とっても現実的になって最近気付いたことは、東京の一極集中、そして田舎は限界集落と言われていますが、広大なアメリカも、広大な中国も実は田舎の存在。第一次産業、農業や牧畜や漁業でそもそも成り立っているということです。かたや最先端技術を目指す日本では世界でも珍しいくらい、食料を自給していません。以前石破大臣の時に地方再生

が話題になったことはあったけれど、今の政権は中国敵視外交に夢中です。しかし明日炊くコメの確保は基本中の基本です。今若者は田舎へ特に古民家とかへ移住し、農業を始める人たちもいますが、これは希望だと思います。高齢者は便利でバリアフリーの都会のマンションへ引っ越して、若者は田舎へ、という流れはこれからも続いていきそうです。田舎では人口密度が低く、インフラ維持にもお金がかかります。病院とかも撤退が続いているようですが、肥料や殺虫剤の高騰は有機農業の追い風でもあります。田舎の再生を目指し、若者を呼び込むことにこそ、税金を使う価値があると思っています。

それに安倍政権以来、日本の衰退が目につくようになり、安倍首相は強い日本の再興を目指したのですが、うまくいかないので、せめて良く見せようと統計方法や公文書を改ざんしたりしました。不正の横行する発展途上国へと転落しつつあるなと実感しました。「アベノミクス」と言う経済政策を進めましたが、お札をどんどん刷って、日銀が買っていく、あたかも経済が回っているかのように見せると言う政策で、黒田さんがかわっても未だに続いています。日銀の借金は世界最大に積み上がり、今インフレ対策のために利上げを行うと、借金の利子が増えてしまうので、ニッチもサッチもいかないということです。今後円の価値はどんどん下がって、そのうち紙切れ同然になってしまうと、警告する人もいます。円安で外国からの旅行者が増えてよかったと、喜んでいる場合ではないのです。

高齢者を少ない数の若者で支えることで、介護保険のヘルパーの給料は少ないままで、受益者負担を増やす方向での改革がされていますが、これが進めば、「貧乏な高齢者は施設へ集めて介護の効率化を図る」という流れになるだろうと思います。僕の若い頃にはスウェーデンの高福祉社会で、「施設から自宅へ」という流れでした。僕の関わった重度障害者の運動も「施設から出て普通に街で暮らしたい」というアパート暮らしを支える、介護者集めの運動でした。しかし今は田舎からの訪問介護の撤退が進んでいて、施設に入らないでは暮らせないようです。「自宅の畳で息をひきとる」のは、贅沢なことなのでしょう。日本がますます貧乏になり福祉予算がなくなってしまうと、「行き過ぎた個人主義ではダメだ。昔の大家族制度に戻ろう」という今の自民党の主張が現実的になると思います。自由と人権が引っ込み、大学進学率も下がり若者文化も消え、一人暮らしも贅沢だと、やがて不祥事は恥だと外には漏らさない大家族に戻って、身内が身を寄せ合う時代に戻るかもしれないと思います。「家の恥は墓まで持っていく」と言う高齢者がいますが、それが戦争体験を子へと語らず、下の世代に引き継がれなかった大きな要因だと思いますが、またそう言う時

代に戻りそうです。若者への今の調査で「悩みの相談相手」が友人が母親へと逆転していて、より身近な血縁重視になってきていて、家から出ない引きこもりも、増え続けています。日本の歴史は、明治の文明開化から国力を強め、世界を相手に戦争していく歴史を、また一から繰り返すのかもしれませんが。江戸時代に長く平和が続き、明治以降は発展に目がくらみ、戦争はやってみるまでその現実が分からなかったかもしれないです。今は前の戦争が終わって80年、新たな戦前です。

自民党の議員さんが「理想は大家族だ」と言っていて、「この核家族の時代で、お一人様が増えていっているのに、一体何をいっているのか？」と笑っていたものでしたが、今となってはその現実味が出てきました。

テレビニュースで秋祭りがあり、神輿の鉢合わせの映像をやっていました。目つきの悪い男たちが睨み合って、死者まで出している神輿の鉢合わせですが、みなさん「すごいすごい」と興奮していますが、どこがいいのかさっぱりわかりません。きっと台風も来ない瀬戸内海しかない愛媛県人は、暴力的なぶつかり合いが珍しいのかもしれないです。波津子さんは五島の漁師の娘ですが、毎日荒波の海に漁船で出ていく父を見て育ったので、父の死が日常的だったと言っていました。今年もかき比べで、意識不明になった人がいるようですが、来年は、こんな秋祭りへの寄付は断ろうと思っています。

あとがき

佐野卓志

作業所には、来る人もいればやめていく人もいますが、新しく来る人がいないと、メンバーが減り続けてしまって、規制緩和の結果作業所がますます増えていて、メンバーの確保は、命綱のようなものです。施設にメンバーの紹介をする相談員さんの役割が重要なのですが、多くの作業所は自分の所に紹介するように、自前で相談支援事業所をもっています。でもムゲンとか多くの作業所は持っていないので、じっと待っている状態です。そういう作業所では、紹介してくれた相談員さんにチップというか、お礼をするしきたりがあるということです。初耳でしたので、びっくりしたのですが、そういえば、ムゲンにくるメンバーは、仲間の紹介か行政からの紹介がほとんどであることに気づきました。そうだったのか！です。

また別のところで聞いた話ですが、政府がコロナ対策で現在、「メンバー

が自宅で作業をしても来たとカウントできる」ことになっています。それでほとんどのメンバーを自宅待機にして、鶴とかを自宅で折ってもらって、事務所が全員のハンコを預かっていて、勝手に通所のハンコを押しているところがある、ってすごいなあ。職員の人件費が相当浮く話です。でも規制緩和で福祉の気持ちがなくとも、金儲けで施設を作ることも奨励されていますので、当然の結果かなとも思います。

B型はどこも経営が苦しく、「土曜日に休んでいるのはムゲンくらいだ」と言われました。福祉に競争原理を働かせるのは、僕は今でも反対です。

今行政は施設内での虐待に目を光らせていて、虐待の研修会も多く、ムゲンでもメンバーに無記名で虐待について書いてもらったりしました。とにかく虐待をなくすには施設をオープンにするに限ると思います。僕は花壇に水をやりながら、隣近所の人と雑談したり、登下校の小学生に挨拶したり、とにかくよく喋っています。松山の精神科病院でも昔の病院解放化で始めた、年に一回のバザーを今もずっと続けているところもあります。虐待事件のあった神出病院や滝山病院は写真で見ても、おそらく「人の出入りがとても少ないだろうな」、と感じます。外部の人の目が多ければ、虐待は防げるはずですが、大阪で精神病院を訪問して、監視の目を光らせていた「大阪精神医療人権センター」は橋下知事の時に予算を切られたという話もありました。

ムゲンの作業ですが、コロナとSDGsの点からアメニティーは見直されていて、受注が減っていて、際近は野草などのお茶の袋詰めも増えています。包丁研ぎもメンバーに職人さんがいて、300円でやっています。夏場の施設外労働の工場駐車場の水やりも10月までで終わりました。

障害者の災害時の支援を行う「ゆめ風基金」も自立生活センターの須賀さんが、とても積極的にやってくれるので、僕たちは第一線から退いている状態です。

今年は県外の研修にはいかなかったのですが、メンバーの交通費などに使っている寄付も相変わらず、募集しています。一口3000円で郵便振替01640-7-74936です。宛先はNPO法人ぴあです。

昔からムゲンの掲示板で交流のある横浜の荒木さんが来年からパソコンを教えに来てくれる予定です。

僕も来年70歳でや波津子さんは2歳年上ですが、いつまで一線でやれるかわからないのですが、僕や波津子さんがいなくなっても、施設がうまくやっていけるといいなあと思っています。